

# メルヴィルとその風切り羽

## —「エンカンタダス」における事実の幻惑

田 浦 紘一郎

はじめに

本稿は1856年の*The Piazza Tales*に収録されたHerman Melvilleの短編作品“*The Encantadas, or Enchanted Isles*”（以下、「エンカンタダス」）の制作過程とその語りの形式を追いながら、そこに事実の作家からロマンスの作家へと飛翔しようとするMelvilleの苦悩の痕跡を読み込む作家論的な試みである。本作品の研究は、I. Newberryが指摘したように、その創作の情報源を探る書誌学的な問いと、スケッチの集積という雑多な構成を持つ本作を、彼の作品群の中にどう位置付けることが可能か、という作家的統一性をめぐる問いに分かれてきた（49）。対し、近年勢いを持つ対抗言説的な批評は、本作に19世紀の政治的言説への抵抗や、同時代の科学的分類法へのMelvilleの懐疑の態度を論じている。近年の研究において興味深い事実として、「エンカンタダス」の批評性が、テキスト内のMelvilleの事実誤認や書き間違いに多く見出されているということが挙げられる<sup>1</sup>。Northwestern-Newberry版*The Piazza Tales*の注釈によれば、「エンカンタダス」にはMelvilleの意図によるであろう“factual errors”（612n）が複数存在している。そしてそれらの間違いは、それ自体が批評的価値を持つものとして、われわれの目の前にあるテキストに保持されてきたのである。

本稿では、テキストにおける“factual errors”そのものの解釈ではなく、かように多くの誤りをMelvilleに許した「エンカンタダス」執筆という彼の経験に焦点を当ててみたい。そこから見えてくるのは、本作を執筆するMelvilleの挑戦的な軽やかさ、あるいは歴史や事実に対するある種の軽薄さである。「エンカンタダス」の島々は、自らの実体験を語る作家として大衆に評価されることの多かったMelvilleにとって、真偽の足枷から逃れて創作を行うための実験島として機能した。本稿はそのように結論づける。その目的のために、まずはMelvilleが1848年に出版者John Murrayに宛てた手紙から、海洋小説執筆において彼に終始つきまとった、事実と虚構をめぐる作家的葛藤を前景化したい。

## 1 事実の足枷と想像力の風切り羽

1848年3月、前作 *Omoo* の続編として構想されていた *Mardi* 執筆中の Melville は、彼のこれまでの長編作品をロンドンで出版していた John Murray に対し、自身の創作の決意を知らせる一通の長い手紙を送っている。

I wrote you some time ago — I think my last but one — gave you to understand, or implied, that the work I then had in view was a bona-fide narrative of my adventures in the Pacific, continued from “Omoo” — My object in now writing you — I should have done so ere this — is to inform you of a change in my determinations. (*Correspondence* 105-06)

太平洋における“narrative of my adventures”に対し、ラテン語で「正真正銘の、誠実な」を意味する“bona-fide”を付けるなど、その表現には誇張めいたものも感じられるものの、Melville は当初、*Mardi* をこれまでの作品 *Typee* や *Omoo* のように、自らの捕鯨航海の経験を大いに取り入れた半自伝的な作品として構想していたようだ。しかしながら、この手紙を送った時点で、彼の原稿はがらりとその趣を変えていた。引用の後、Melville は当初の物語内容であった“my adventure”から所有格を外し、Murray に対し、自身が次に執筆する小説が“Romance of Polynesian Adventure” (106) であると言い換えている。

Melville はなぜこのような決意表明を行ったのだろうか。自身の執筆態度の変化について、彼はいくつかの理由を述べている。その一つが、彼の作品の内容を真実か嘘かという点でのみ捉えようとする読者たちへの反抗だ。Melville は当時の読者たちの多くが彼を嘘を事実のように報告する“a romancer in disguise” (*Correspondence* 106) とみなしていることに強い憤りを感じていた。そのような読者に対し、彼は真に虚構の作品とは何かを見せつけようとしたのである。“[A] real romance of mine is no *Typee* or *Omoo*, & is made of different stuff altogether” (106)。

Melville が経験の語り手から虚構の物語作家へと舵を切ったもう一つの理由は、彼がポリネシア世界にこれまで文学化されたことのない诗情を感じていたからだった。“I have long thought that Polynisia [sic] furnished a great deal of rich poetical material that has never been employed hitherto in works of fancy” (*Correspondence* 106)。そこには他なる者やその異なる世界の安易な理想化があることは否定できないだろう。だが本稿において重要なのは、Melville がそのような非現実的な作品を描くことに自らの作家性の飛翔の契機を感じながら

も、実際のところ、彼の筆は思うように進まなかった、という想像力の停滞の痕跡である。

However, I thought, that I would postpone trying my hand at any thing fanciful of this sort, till some future day: tho' at times when in the mood I threw off occasional sketches applicable to such a work. — Well: proceeding in my narrative of *facts* I began to feel an invincible distaste for the same; & a longing to plume my pinions for a flight, & felt irked, cramped & fettered by plodding along with dull common places, — So suddenly abandoning the thing altogether [sic], I went to work heart & soul at a romance which is now in fair progress, since I had worked at it with an earnest ardor. . . . My romance I assure you is no dish water nor its model borrowed from the Circulating Library. (*Correspondence* 106)

Melvilleはこれまで自分が挑戦してこなかった幻想的な作品を書こうとしつつ、一編の長編を完成させることは先延ばしにしていた。あるいはできずにいたのだ。しかし、ときにはそのような作品にふさわしい“sketch”を即興的に執筆することがあったという。この文脈において、理想の作品に結実するための断片的習作を意味する“sketch”の語は、のちにMelvilleが「エンカンタダス」の章立てに用いた語でもある。この点についてはのちに触れるとし、ここでは引用においてMelvilleがイタリック体を用いた“facts”への、彼の態度を確認したい。一個の作品に至ることのないスケッチを書きながら、また手紙の冒頭で述べていたような“a bona-fide narrative of my adventures” (105) に着手しながら、Melvilleは自らを作家として羽ばたかせた事実なるものに対し、“invincible distaste”を感じはじめていた。自身の現状への揺るぎない嫌悪感は、“irked, cramped & fettered”といった、身動きが取れない状態を示す様々な形容詞の連鎖からも伝わってくる。ここで注視すべきは、それらの語句のわずかな隙間に、“longing to plume my pinions for a flight”との短い語句が書き込まれていることである。鳥が空へと飛び立つための風切り羽を意味する“pinions”、およびその翼を繕う動作を示す“plume”の語が、彼の憎悪の念に押し潰されそうに挟まれていることには、物珍しい体験を語る作家として注目を浴び、またそのような作家であることを求められたMelvilleの作家的苦悩が示されている。彼が目論んだロマンス作家への移行には、自らの過去という“facts”との対決が常につきまとった。我が冒険を語る作家としてデビューしたMelvilleにとって、実は創作の糧であると同時に、彼の物語作家としての成長の足枷でもあったのだ。

どの貸本屋の本にもその題材を見つけないような新奇なロマンスを描くことは、作家としてのMelvilleの自己形成にとり、重要な位置を占めていた<sup>2</sup>。

Melvilleは読者との関係において、また自らの作家としての矜持のために、事実と経験の作家からロマンスの書き手への転向を考えていた。それは作風だけでなく、彼の自己演出の技法にも現れている。1849年1月、MelvilleはMurrayに対し、“Unless you should deem it *very* desirable do not put me down on the title page as ‘the author of Typee & Omoo’” (*Correspondence* 114-15) と伝えている。過去の作品のタイトルは、彼にとって、読者への好まざる先入観を植え付けるものでしかなかった。

結果的に、Melvilleの願いはもっとも残酷な形で裏切られることになる。John Murrayは詩やフィクションをほとんど出版しない方針をとっており、Melvilleの決意表明にもかかわらず、*Mardi*の出版は、それが事実に基づいていないといった理由から拒否されたのである (*Correspondence* 114n)。その後、友人であるJohn Romeyn Brodheadの尽力によって、*Mardi*はリチャード・ベントリー社から出版された。

以上見てきたように、*Mardi*執筆過程におけるMelvilleの手紙には、初期Melvilleの作家としての変容の契機、本作を日本語に完訳した坂下昇の言葉を借りれば、彼の「ロマンスへの突入」(坂下 273)が見出せる。Melvilleはどうか*Mardi*を出版まで漕ぎ着けたが、当時の一般読者への受けは芳しくなく、現在においても、本作は二年後に出版された*Moby-Dick*への“rehearsal” (Gale 269) として見られることが一般的である。次節では、*Moby-Dick*の完成によって幕を閉じたかに見えるMelvilleの事実との戦いが、その後の「エンカンタダス」執筆においても持続されていたことを、本作の複雑な出版過程から考察したい。

## 2 物語の座礁

その草稿は残されていないため、確証には至らないものの、よく知られるように、Melvilleの短編作品「エンカンタダス」は、彼が完成できなかった長編小説のアイデアが一部分解・転用されて作られた間に合わせの作品だとみなされている。1853年11月、Melvilleがハーバー & ブラザーズ社に送った手紙によると、彼は当時、300ページほどの亀狩りについての物語、“Tortoise Hunting Adventure” (*Correspondence* 250) を順調に書き進めていた。しかし、この作品が完成することはなかった。そこには大きく二つの要因が考えられる。一つは、1853年12月10日に起きたハーバー & ブラザーズ社ニューヨークのオフィスの

大火災により、同社の営業が1855年の夏まで実質的に止まってしまったこと。そしてもう一つは、Melville自身、筆が思うように進まず、その作品を完成させることができなかつたということである。Melvilleはすでに前金として300ドルを受け取っていたが、1854年2月に、“a variety of causes” (257) という曖昧な言葉によって、その作業の遅れを伝えている。結局、その物語が日の目を見ることはなかつた。同社はMelvilleに原稿を催促することも、前金の返金を求めることもなく、彼はその未完の作品の原稿料だけを手にしたのである。

この過程において特筆すべきは、Melvilleはハーバー & ブラザーズ社に対しては2月に作品の停滞を伝える一方で、同年3月、アメリカの文芸誌 *Putnam's Monthly Magazine* に「エンカンタダス」の最初の四つのスケッチを掲載していることである。それは“Salvator R. Tarnmoor”の偽名を使って三回にわけて連載され、そこにはガラパゴス諸島の亀狩りに関するエピソードが含まれている。彼が偽名を使ったのは、何らかの理由で執筆が滞っていた冒険もののアイデアを、同時期に別の媒体に投稿していたことを隠すためだったかもしれない<sup>3</sup>。Melvilleのこの鞍替え行為について、書簡集の注釈者は、たとえ *Putnam's Monthly Magazine* の連載にMelvilleの「亀狩り」の草稿が利用されたとして、それはわずかな断片に過ぎなかつたはずだ、と推測している (*Correspondence* 249n)。これはMelvilleへの擁護であるといえるだろう。

本稿はこの「亀狩りの冒険」と「エンカンタダス」をめぐるMelvilleのゴシップを、別の角度から捉えてみたい。Melvilleは何らかの理由で300ページの冒険譚を完成させることができず、そのアイデアの一部を雑誌連載に流用した。それはそうとして、彼は「エンカンタダス」のような短編形式の作品においてさえ、これを筋の通った物語として書くことができなかつたのだ。本作の構成面のアンバランスさは、これまでいくつかの先行研究によって指摘されてきた。例えばK. M. Wheeler は、全10スケッチのうち、第8スケッチ“Norfolk Isle and the Chola Widow”のみを“a genuine ‘short story’” (57) として評価している。佐久間みかよもまた、この第8スケッチのみを「際立った悲劇的要素を含んだ展開」(96) を持つものと評している。そのような評価の背景として、この第8スケッチのみが、直接話法を用いたダイアローグの連続によって、つまり、出来事と登場人物たちの声の掛け合いによって物語が進行する、伝統的な語り形式が用いられているということが挙げられるだろう。その他のスケッチにおいては、Melvilleは島の外観やその生態系の描写、および歴史の紹介といった紀行文的なスタイルに終始している。長編作品の完成を諦め、偽名を用いた雑誌連載へと移行したことは、結果として、物語作品とも紀行文ともつかぬ、ちぐはぐな執筆を彼に許したのである。

もちろん、ここで本稿の目的は、そのような均整性の欠如によって、本作の小説的価値を下げることではない。今度は本作の語り形式を、前節において概略したMelville初期の事実と虚構との対立から眺めてみよう。その際、彼がJohn Murrayへの手紙において、スケッチという言葉を、事実の物語からロマンスへの予行演習として用いていたことを想起されたい。

### 3 スケッチと語りの幻惑

Melvilleは*Moby-Dick*その他ほとんどの作品では、“Chapter”およびそれら各章の内題によって物語の単位を切り分けている。例外といえるのは1852年の*Pierre*であり、その主人公である若きアメリカの作家、Pierre Glendinningの自意識を反映してか、物語の各セクションは“Chapter”ではなく“Book”とその内題によって区切られている。「エンカンタダス」に目を転じれば、“Sketch First”から“Sketch Tenth”による章分けは雑誌連載時から用いられ、のちの作品集*The Piazza Tales*に収録される際に保持されていることから、これがMelville自身の意図によるものであることは間違いないだろう<sup>4</sup>。

興味深いことに、彼はそれ以前にも以降にも、この“Sketch”の語によって作品内部を仕切ることはしていない。先に述べたように、Melvilleは*Mardi*執筆中、自身の新たな作風を模索するための“sketches”をときおり執筆することがあったという（*Correspondence* 109）。その際に彼が述べていたような、非現実の物語への訓練を示す“sketches”の語を、「エンカンタダス」における、あくまでも作品の章立てとしての“Sketch”の語に直接結びつけることはできない。少なくとも後者は、そのような物語作品ではないからだ。ただし、*Mardi*において完全なるロマンスの物語を執筆し、事実の足枷から逃れようとしたMelvilleは、「エンカンタダス」においては、物語を描くこととは別の方法を用いて、この事実なるものと対峙しようとしている。本作は、ガラバゴス諸島を舞台に何かを物語るというより、その実在の島々について何かを語ってみることが試みられた作品なのだ。

では、“Salvator R. Tarnmoor”の仮面を被ったMelvilleは、本作においてその島々をどのようにスケッチし、読者に紹介したのだろうか。第1スケッチの冒頭、語り手は次のように描写している。

Take five-and-twenty heaps of cinders dumped here and there in an outside city lot; imagine some of them magnified into mountains, and the vacant lot the sea; and you will have a fit idea of the general aspect of the Encantadas,



or Enchanted Isles. A group rather of extinct volcanoes than of isles; looking much as the world at large might, after a penal conflagration. (Piazza 126; underline added)

引用において、語り手はその島々の様相を客観的に描写するのではなく、読み手の脳裏にその荒廢のイメージを立ち上がらせるよう、比喩的な言語を費やしている。下線に示されるように、それは島々というよりは死火山の群れのようにであり、それはまるで大災害の後の世界を見ているかのような印象を呼び起こす。

この冒頭の筆致を、同時代の自然科学的な描写と比較してみよう。作家としての人生を始める前、捕鯨水夫として過ごしたMelvilleは、1841年、タヒチに向かう航海の途中で実際にガラパゴスの島々を訪れている。その六年前、博物学者として世界一周の旅をしながら、途中この地を訪れたのがCharles Darwinだ。航海のあと、Darwinは1839年に*The Voyage of the Beagle*を発表した。先に事実関係を確認すれば、Merton M. Sealtsの仔細な調査によって、Melvilleが1847年8月にこの航海記を購入していることが判明している(55)。とはいえ、「エンカンタダス」のスケッチにDarwinの記述が影響を与えているとは言い難い。Darwinによるガラパゴス諸島の報告は、次のように導入される。

This archipelago consists of ten principal islands, of which five exceed the others in size. They are situated under the Equator, and between five and six hundred miles westward of the coast of America. They are all formed of volcanic rocks; a few fragments of granite curiously glazed and altered by the heat, can hardly be considered as an exception. (Darwin 322; underlines added)

MelvilleもDarwinも、火山岩をその島全体の特徴として捉えていることは共通している。二人の描写において決定的に異なるのは、Darwinが用いる語彙は、引用の下線に示されるように、「から成る」、「位置している」、「すべてが構成されている」と客観的であるのに対し、Melvilleのそれには、客観的事実を確認するような「である」に相当するような動詞が一度も使われていないということだ。Melvilleの描写は、先のスケッチにおける“*imagine*” (Piazza 126) という命令形の動詞に示唆されるように、読み手に対し、あくまでも比喩表現を介した現実の再構成を迫るのである。

読み手の想像力に働きかけるようなMelvilleの語りモードは、第一回の雑

誌掲載分であった第1から第4スケッチの随所に確認することができる。島に生息する苔むした陸亀を見た“first impression” (Piazza 132) と、その印象が引き起こした悪夢をめぐる第2スケッチでは、語り手の「わたし」は読者に対し、“behold these really wondrous tortoises”と誘うように語りかける (131)。島全体を眺めるため、“Rock Rodondo”と呼ばれる岩の塔に登る第3スケッチでは、“let us ascend” (137) と、「わたし」はわれわれ読者を島の観察者の一員に引き入れようとする。そのような筆致がもっとも過剰に用いられるのが第4スケッチだ。スケッチの冒頭、“Rock Rodondo”に登ろうとする者たちに対し、語り手はその手順を次のように紹介している。

Go three voyages round the world as a main-royal-man of the tallest frigate that floats; then serve a year or two apprenticeship to the guides who conduct strangers up the Peak of Teneriffe [sic]; and as many more respectively to a rope-dancer, an Indian juggler, and a chamois. This done, come and be rewarded by the view from our tower. How we get there, we alone know. (Piazza 137)

フリゲート艦乗組員として三度の世界一周旅行、大西洋上に位置するテネリフェ島での一、二年間の年季奉公、インドの大道芸人のもとの見習い修行など、岩の頂上にたどり着くための秘訣として語り手が耳打ちするものは奇妙なものばかりである。その露骨なユーモアが目論むのは、島を読み／眺める読者のパースペクティブの幻惑であり、われわれは知らず知らずのうちに、その島の様相や現実そのものではなく、それらを錯覚のように誤解したり歪めて認知することに誘われるのである。

この見ることの幻惑は、第一回の連載に一貫するMelvilleのテーマであった。語彙の点から見れば、例えば第4スケッチの終盤、語り手は“no wonder though, that among the Encantadas all sorts of ocular deceptions and mirages should be met” (Piazza 142) と述べ、その島々に溢れる奇妙な現象を正当化しているが、そのような視覚の錯乱に関する語彙は、すでに第1スケッチ中にも登場している。語り手の現在においてニューヨーク州の都市部にいると思われる「わたし」は、エンカンタダスの島を去ったいまなお、都会の喧騒を離れて“Adirondack Mountains”の深部を散策するとき、その神秘めいた自然の中に魔の島々の景色をありありと幻視してしまうことがあると述懐している (129)。その際、彼にはその現象が自身の卓越した空想力によるものなのか、はたまたいまなお彼に取り憑くガラバゴス島の魔力によるものなのかわからない。“Nay, such



is the vividness of my memory, or the magic of my fancy, that I know not whether I am not the occasional victim of optical delusion concerning the Gallipagos [sic]" (129)。Melvilleは第1スケッチにおいては、語り手をガラパゴス島の魔力による“victim of optical delusion”として描いている。しかしながら、テキストを読み進める読者にとっては、語り手が見たガラパゴスの風景そのものではなく、その語られ方、つまりは語り手の「わたし」こそが、その欺きを仕掛ける側なのである。

#### 4 史実の幻惑

次に、「エンカンタダス」の第二回以降の連載分から、その語りの様式の変化を追ってみよう。そこで特徴的なのは、語り手である「わたし」の役割が、島の景観の報告者から、その島の史実を叙述する者へと変容していることだ。第一回の連載で見られた視覚的幻惑の要素は、それ以降の連載ではなりをひそめ、第5スケッチでは1813年にDavid Porter率いるアメリカの軍艦がこの島に接近したエピソードが、続く第6スケッチでは、約2世紀前に島を溜まり場にた海賊たちのエピソードが、第7および第9スケッチでは、実在したとされる島の支配者たちの歴史が語られる。

このような島の歴史を披露するに際し、語り手は第5スケッチにおいて次のように述べている。

Here be it said that you have but three, eye-witness authorities worth mentioning touching the Enchanted Isles:—Cowley, the Buccaneer (1684); Colnett the whaling-ground explorer (1798); Porter, the post captain (1813). Other than these you have but barren, bootless allusions from some few passing voyagers or compilers. (Piazza 143; underline added)

語り手は魔の島々を語るに値する権威者の名前を列挙するとともに、引用の下線において、それ以外の証言は「通りすがりの航海者や編纂者の不毛で無益な言及」でしかないと言いつけて捨てるが、果たして「エンカンタダス」を執筆するMelvilleは、その権威の側に属しているのだろうか。Russell Thomasは、Melvilleがガラパゴス諸島の記述について参照したとされるPorterの航海記録と「エンカンタダス」第5スケッチの描写を詳細に比較し、Melvilleがその島々の印象を自身のイメージに適うように作り変えるため、Porterの記述を参照しつつも、それらを故意に捻じ曲げて利用していると論じている(446)。また、そのような先行するテキストの軽視とも取れる行為は、本作執筆の中で秘密裏に

行われたわけではない。例えば第9スケッチ“Hood’s Isle and the Hermit Oberlus”において、島の廢屋で発見されたボロボロの手記を手に入れた語り手は、そこに書かれていた島の記述と、当時流布していた“Porter’s version” (Piazza 170)の島の記述に差異を見つける。その際に語り手は、Porterではなく、自身が手に入れた手記の執筆者にこそ、その記述の卓越性と正当性があると述べている (Piazza 169-170)。

このような、Melvilleの過去のテキストに対する書き換えや軽視の態度は、第7スケッチにおいては、ガラパゴスの歴史そのものへの創造的改変へと繋がっている。第7スケッチ“Charles’s Isle and the Dog-King”では、獷猛な犬たちを兵士として付き従えた“Dog-King”なる男によるその島の支配と、民衆の反乱によるその王権の崩壊の顛末が語られる。まず、この荒唐無稽な設定は、本スケッチが民間伝承という語りの形式を持っていることに由来している。語り手はその冒頭、“And hereby hangs a history which I gathered long ago from a shipmate learned in all the lore of outlandish life” (Piazza 146) と述べるが、ここで紹介される名もなき“a shipmate”は、本作を執筆するMelvilleその人の分身であるかもしれない。それは第5スケッチにて紹介された、Porterら権威ある証言者たちの対極に位置する存在だ。

最後に、この第7スケッチにおけるMelvilleの歴史的事実の誤りについて一点確認したい。聞き伝えという形式を持つ第7スケッチだが、このスケッチの実質的な主人公ともいえる“Dog-King”のモデルについては、それがJosé de Villamilであることが指摘されている (Piazza 612n)。Villamilはスペイン人の父とフランス人の母のもとにルイジアナで生まれ、のちにガラパゴス諸島のエクアドル併合に尽力した人物だ<sup>5</sup>。Melvilleはこの人物を、次のように自身のスケッチに取り入れた。

During the successful revolt of the Spanish provinces from Old Spain, there fought on behalf of Peru a certain Creole adventurer from Cuba, who, by his bravery and good fortune, at length advanced himself to high rank in the patriot army. (Piazza 146-47)

テキストの情報を史実と照らし合わせてわかることは、Villamilがクレオールであったという事実は採用しながら、Melvilleがその人物をニューオーリンズ生まれではなくキューバ生まれに、さらにはエクアドルではなくペルーのために戦った人物へと改変しているということだ<sup>6</sup>。語り手はその後、このクレオールについて、“I forgot his name” (147) とさえ述べる。ここには「エンカンタ

ダス」を執筆するMelvilleのある種の事実への軽薄さ、歴史的事実を可変的なものとして扱う態度が見て取れる。第一回の連載において“ocular deception” (142) の場としてガラパゴス諸島を描写したMelvilleは、その幻惑の雰囲気を持続させたまま、以降のスケッチにおいて、史実のごまかしという手法を試していったのだ。

### おわりに

ガラパゴスという、当時の多くの読者にとって新奇な島々を題材に扱った「エンカンタダス」は、“Salvator R. Tarnmoor”の偽名を用い、作者の真実の名を隠しながら書き進められた。その10のスケッチの執筆は、大衆からの評価に悩まされてきたMelvilleにとって、真偽の足枷から逃れて創作を行うための実験的な試みとなったはずだ。本稿は「エンカンタダス」の作品の語り、Melvilleの事実に対する軽薄さを見てきた。しかし、その軽さは、冒険作家からロマンスの作家へと飛翔しようとするMelvilleの苦悩と、事実縛られた物語を書くことへの揺るぎない嫌悪によってこそ生じたものであった。

### Notes

- 1 例えばYoshiaki Furuiは、「エンカンタダス」におけるMelvilleの地名表記の誤りについて、これを彼の知識の欠如に起因するものではない意図的なミススペルとして肯定的に捉えている (84)。また、Denise Tanyolは、Melvilleが本作執筆においてエクアドルの歴史とガラパゴスの歴史を意図的に混同した場合に生じるMelvilleの帝国主義批判の可能性について論じている (264n21)。
- 2 個を超えて一族の経験や歴史にこだわり、その変え難き過去を積極的にロマンスの可変性に投げ入れたロマンス作家Nathaniel Hawthorneは、Melville的ロマンスの対極にあるように思われる。*The House of the Seven Gables*の中で、Hawthorneはセイラムの魔女狩りに加担した先祖の罪を最大限に活用し、これを文学の素材とした。
- 3 しかし、一部の出版関係者たちは、“Salvator R. Tarnmoor”がMelvilleの偽名であることを見抜いていた (*Piazza* 601n)。
- 4 雑誌連載当時、「エンカンタダス」は第一回連載が1・2・3・4、第二回が5・7・8・9、最終回が10・11スケッチと、Sketch Sixthが抜け落ちた形で掲載されている (*Piazza* 611n)。Melvilleはこの第6スケッチを書き足すことはせず、本作が*The Piazza Tales*に再録される際にもその章番号を正しくふり直すのみである。よって、これは雑誌編集者がMelvilleのミスをそのまま印刷に回したものと推測さ

- れる。
- 5 ガラパゴス諸島の入植の歴史をまとめあげたオクタビオ・ラトーレは、その入植史の最重要人物としてこのJosé de Villamilの名を挙げている (54-59)。
  - 6 この出身地の変更について、Nicholas SpenglerはそこにMelville=“Salvator R. Tarnmoor”によるCuban creoleへの同胞意識が隠されているとする (75)。

#### Works Cited

- Darwin, Charles. *The Voyage of the Beagle*. New American Library, 1988.
- Furui, Yoshiaki. “Against the Assaults of Time: Uncertain Futurity in ‘The Encantadas.’” *Leviathan: A Journal of Melville Studies*, vol. 23, no. 3, 2021, pp. 73-88.
- Gale, Robert L. *A Herman Melville Encyclopedia*. Greenwood Press, 1995.
- Hawthorne, Nathaniel, *The House of the Seven Gables*. W. W. Norton, 2005.
- Newberry, I. “‘The Encantadas’: Melville’s Inferno.” *American Literature*, vol. 38, no. 1, 1966, pp. 49-68.
- Melville, Herman. *Correspondence*. Edited by Lynn Horth, Evanston and Chicago: Northwestern UP and the Newberry Library, 1993.
- . *The Piazza Tales, and Other Prose Pieces: 1839-1860*. Edited by Harrison Hayford, Alma A. MacDougall, and G. Thomas Tanselle, Evanston and Chicago: Northwestern UP and the Newberry Library, 1987.
- Sealts, Merton M. *Melville’s Reading*. U of Wisconsin P, 1952.
- Spengler, Nicholas. “Tracking Melville’s ‘Dog-King’: Creole Sympathies and Canine Warfare in the Americas.” *Leviathan: A Journal of Melville Studies*, vol. 21, no. 3, 2019, pp. 71-93.
- Tanyol, Denise. “The Alternative Taxonomies of Melville’s ‘Encantadas.’” *The New England Quarterly*, vol. 80, no. 2, 2007, pp. 242-79.
- Thomas, Russell. “Melville’s Use of Some Sources in The Encantadas.” *American Literature*, vol. 3, no. 4, 1932, pp. 432-56.
- Wheeler, K. M. “‘The Half Shall Remain Untold’: Hunilla of Melville’s Encantadas”, *Journal of the Short Story in English*, vol. 52, Spring 2009, pp. 55-69.
- 坂下昇『『マーディ』ができるまで』、『Melville全集 第三巻 マーディ(上)』国書刊行会、1981年、pp. 269-78。
- 佐久間みかよ「群島の思考—Herman Melvilleの “The Encantadas, Enchanted Isles”考」『和洋女子大学紀要』第51集、2011年、pp. 91-100。
- ラトーレ、オクタビオ『ガラパゴスの呪い—入植者たちの歴史と悲劇』、新木秀和訳、図書出版、1995年。